

# 異分野をつなぐ 翻訳・対話・空間を

環境・社会理工学院 融合理工学系  
野原 佳代子 研究室

のほら かよこ 教授 1990年学習院大学人文科学研究科修士課程修了。1992年オックスフォード大学歴史学修士号、1998年同大学翻訳理論学博士号取得。KU Leuven(ベルギー)を経て、2004年に東京工業大学に着任。2016年、改組により同大学環境・社会理工学院 融合理工学系教授。



それぞれの専門分野の垣根を超えた交わりがイノベーションに必要になってくる時代。分野の壁を越え、相手の言っていることをどう理解し、自分の言いたいことをどう伝えるか。人と人の見えない部分をどう読み取り、読み替えていくかのコミュニケーションから見えてくる世界とは？

## 翻訳学とは？

翻訳と聞いて思い浮かべるのは、どういうものだろうか？英語の邦訳や同時通訳の人が外国人の方のインタビューを瞬時に日本語に直している風景などであろうか。それだけが翻訳ではないと野原先生はいう。例えば、科学に関する難しい情報を、子ども新聞向けに分かりやすく書き換えることも翻訳である。一般に翻訳は、学問上大きく3つに分けられる。言語間翻訳、言語内翻訳、記号間翻訳だ。

よく聞く翻訳にあたるのは言語間翻訳で、その言葉の通り、異なる言語の間での翻訳である。しかし翻訳は、同じ言語内でも行われる。それが、言語内翻訳だ。例えば、大阪方言から標準語、工学の研究者が使う言葉から一般の人が使う言語に置き換えるといった場合である。先の子ども新聞の例も、その一つだ。3つ目の記号間翻訳とは、

媒体が異なるものの間で、情報を表現し直す翻訳のことを言う。例えば、言語と画像、映画と文学、音楽とスコアブック、漫画原作の映画などといった記号間の行き来のことである。こう見ていくと、ものを表現し直すということのほとんどが翻訳と言える。

これら3つの翻訳形式は独立ではなく、重なり合っている。具体例とともに見ていこう。

たとえば、ある海外小説があり、それが映画化されたとする。表現媒体が小説から映画に変換されているため、この場合記号間翻訳と言えるだろう。しかし同時に、英語の小説から日本語の映画に変換されたのであれば、言語間翻訳であるとも言える。さらに、その映画の子供向けバージョンが制作されたなら、それは言語内翻訳になる。一つの出来事でも、そこには様々な翻訳が行われており、3種類の翻訳は、重なっているのだ。単純な言語間の言い換えではないものも、翻訳と見な

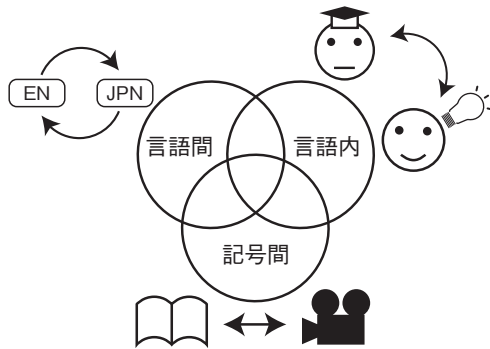


図 3 種類の翻訳の関係性

せることが分かる（図）。

それらを扱う翻訳学の使命は、対象となる翻訳という行為がどのように行なわれているのかを明らかにしていくことにある。すなわち、記号・媒体や言語を変えて伝えるとはどういうことなのか、人々の間で行なわれるコミュニケーションにおいて、どこに翻訳が現れるか、また、どんな影響を及ぼしているのか、そんな問いに立ちむかう。

実は、翻訳学は、日本ではあまり研究されていない分野の一つである。さて、どのように野原先生は、翻訳学に出会ったのだろうか。

### 翻訳学に出会ったきっかけ

野原先生は、修士時代から博士時代まで、イギリスに留学していた。日本での指導教官から、研究は外に出ないとダメだと言われたのがきっかけで、海外で視野を広げることにしたという。留学前までは、古典における日本語の研究をしており、近世の日本語を主に扱っていた。そこから興味が現代語の方に移り、留学先のイギリスでは、比較、つまり比べることによって日本語のことが良くわかるのではないかと思います、日本語と英語の対照研究をしようと思い立った。まずはいろいろな分野・理論に出会ってから研究手法を決めようと、様々な授業に出た。そこで出会った分野で論文を書いてみる。しかし、うまくいかず、立ち止まる。このような日々を繰り返し、あるとき翻訳にたどり着いた。

ここで、翻訳学と他の関連分野との関係性について整理しておこう。言語学と翻訳学は重なっている部分もあるが、翻訳学は、言語以外に文化的・歴史的背景など別のファクターが入るので、言語学に内包されることはない。一方で、日本語研究は、言語学の一つの分野でありながら、他とも関わっている。また、サイエンスコミュニケーションはそれらすべてと関わっている。ここから分かるように、先生は、言語学から翻訳学に移ったというよりも、専門領域を拡大していったのだ。日本では翻訳を専門にする研究者があまりいなかったものの、先生は独自に翻訳理論の研究を進めてきた。そもそも日本で翻訳理論を扱っている場所が少なく、ポストにつけないと言われていたが、その忠告をふりきり、翻訳学の魅力に取り憑かれていた。

イギリスで博論を書き終わり、しばらく学習院大の助教として研究を続け、その後ベルギーでポスドクとして活動するようになった。ベルギーでの生活が大きな分岐点であると、野原先生はいう。再び海外に行くことを止める人もいたが、自分の勘に従い、ベルギーへ向かった。翻訳学の大家であるランベール（J. Lambert）のもと、研究の手伝いをしながら、ポスドクとして文献を読みあさり、自分の翻訳理論に関する知見を深めていった。そんなとき東工大の公募に出会う。

先生は東工大に来て、研究内容を広げるチャンスをつかむ。今までの研究とは一見異なる、サイエンスコミュニケーションを対象とした研究を行なうようになった。サイエンスコミュニケーションとは、広義の異分野間のコミュニケーションの一つである。例えば、科学技術の必要性を一般の方に伝えたり、専門家と一般の方が対話したりすることを指す。翻訳をこのサイエンスコミュニケーションという分野に適用できると野原先生は考えた。相手にとっての言語に捉え直してコミュニケーションをすることが、まさに翻訳そのものだからである。科学技術の社会におけるシェアを翻訳という視点から考えることを東工大に来てから気づき、そこから急に研究に幅が出た。

## 様々な人が集まるプラットフォームを

翻訳学を応用してサイエンスコミュニケーションに関する活動をし始める。そこから、発展させ2009年に研究教育プロジェクトとしてCreative Flowをスタートさせた。これは、「プラットフォーム」であると、野原先生はいう。研究や教育・イベント・授業・人の出会い、それら全てがつながる場だ。デザイナーや編集者と協力して、そういう場の創設活動を始めた。

この一環である、クリエイティブカフェを紹介しよう。東工大生と一般の方を混ぜて、お茶を飲みながらものごとのサイエンスとアート両面から対話をする場である。例として、音楽療法というテーマで行なったときには、本当に医療の面で科学的に効果があるのかを話し合ったり、実際にその場で専門家にピアノを弾いてみたりもしたという。サイエンスの側面とアートの側面の両面をうまく織り交ぜた場を実現した。

今まで意識していなかった視点を持ち込んで自分なりの言説を語ることは、大切であり、それだけで完結するクオリティーではないかとも思う。しかし、そうした場にはときおり見つけた答えの出口がないことがある。いつしか、「話す」先に「作る」があっても良いのではないかと思うようになった。そこから、武蔵野美術大学（以下、ムサビ）との合同ワークショップにつながった（写真）。

この合同ワークショップ「コンセプト・デザインング」は、あるお題に対して、話し合いをしてコンセプトを作り、そのコンセプトを、最終的に何らかの造形物として発表するものである。ワークショップの合間合間、色々なバックグラウンドの専門家が、ものの見方など新たな視点を学生に提供する。それらを、どう活かすかは、学生に委ねられる。

お題は多種多様で、双方の先生方が、集まって案を出しまくるのだそう。そこから、お題の難易度や公平性、アウトプットが画一化してしまわないかなど検討を重ね、最終的に、「面白いかな」どうかでお題を決める。



写真 東工大・武蔵野美術大学合同ワークショップの様子

そうして決まったお題は、本当に多種多様だ。「いつか行ってみたい場所」、「くりかえす」、「大人と子供をつなぐもの」、「思いが伝わるラブレター」などである。最近のものには「恋」もある。

このようなワークショップを通して、先生は現場におけるコミュニケーションからデータを集めて分析し、読み解いていく研究を進めている。次の章から、具体的な研究の中身について詳しく見ていこう。

## 具体的な研究の中身

一般的に研究の流れとして二つの軸がある。「規範的」と「記述的」である。「規範的」とは、ものごとがどうあるべきかということを問題にする一方で「記述的」とは、何かものごとが起こったときに、それがどのようなメカニズムで起こっているのか、ありのままの本質を理解しようと試みる。

野原先生は、後者の研究の在り方をとっている。つまり、何らかの翻訳があるときに、それがどうなっているのか、どうして起こったのかを突き詰めて記述していくのだ。

実際にどのように研究を行っているのかを見ていこう。コンセプト・デザインングを材料にした研究を紹介する。まず、授業でなされる会話を記録し、そのデータを文字に起こす。そして、仮説をたてる。例えば、特定のやり取りが東工大生とムサビ生との間で繰り返されているなど。次に、それに当てはまるものを文字に起こしたデータ上

でタグ付けをする。それらのタグから、実際に仮説は正しいのか、また、どんな法則を見出せるのかを割り出してゆく。どのようなことを基にして、仮説を考えているのだろうか。ポイントは主に2種類あると野原先生はいう。

まずは、先生自身の経験を基にしたものだ。先生は普段から、相手にどのように、自分が言ったことが聞こえているかを考えてコミュニケーションをとっているという。同じ言葉でも、自分が言ったときと他人が言うのとではニュアンスが少し違う。そのズレはどこまでズレているのか、どうして生まれるのかを先生は見ている。

もう一つ仮説を立てる際に意識していることは、既存の翻訳理論の法則をうまく応用するというものである。ここで重要なことは、一見異なると思える物事でも、実は見方によっては、同じように扱えるということがあるということだ。

法則の一つを紹介しよう。明示の法則というものがある。人は翻訳するとき、より分かりやすく言葉を足す傾向があるというものである。天ぷらを英語で説明するとき、「油で揚げた料理」というだけでなく、材料は野菜やエビなど様々な要素を付け足していく。つまり、翻訳すると、より物事が明示化されていくことがある。自分があまり理解していないことを英語で説明しようとしたときに、その物事を理解できていないことが、露呈してしまうことにつながる。

このように、経験的に得たものと既存の法則の応用を組み合わせると仮説をたて、コミュニケーションを見ていくのだ。

先生の新しい研究は、一味違った言語内コミュニケーションの分野と言えるかもしれない。それは、介護と医療におけるコミュニケーションである。例えば、医者は、患者が何の病気か分からず不安になっているときに、患者の気持ちを和らげるようなことを上手に言うことが難しい。確証もない情報を伝えることは、倫理的にも問題となる可能性もあろう。このような現場は、今までブラックボックスであった。とてもパーソナルな部分が多いからだ。しかし、最近になって、医者がこう

したコミュニケーションの破綻を問題として捉え、現場で行なわれる生の言葉のやり取りを研究に使うことについて、徐々に寛容になってきた。そこで、先生は、医療や介護の現場で行われるコミュニケーションについて、コンセプト・デザインングで行なった会話を記録する手法を基に、どこで会話が破綻するかを見ていく。それが、どういうメカニズムで起こるのかを仮説を立てながら、検証していくのだ。

さらに、記号間翻訳の研究にも本格的に動き出そうとしている。ロンドン芸術大学CSM (Central Saint Martins) の研究者たちとともに新しいプロジェクトを開始した。その名も、Deep Model(仮)。サイエンス/テクノロジーとアート/デザインの間の記号間翻訳研究をより発展させ、新たなフィールドを生み出していこうとしている。

## 翻訳の面白さ

先生はイギリスの博士課程で、翻訳の対照研究の題材に、英米の大衆文学を選んだ。大衆文学とは、推理小説やロマンス小説など、誰にとっても読みやすく、ストーリーが面白いものである。日本語訳をたくさん集めて、原本とのズレを探す。ふつう、日本語訳された本を読んでいるとき、どこが原本と違っているかなどは考えて読まないだろう。しかし、ここは日本語だからこそ、こういう表現になっているのだなという風に見ていく、それが悪い翻訳ではなく、そういうものとして認めていく。ズレを解釈していくことが面白いという。こうしたズレを「シフト」と呼ぶ。

例えば、シフトはこんなところに出てくる。「まさか」という表現は、日本語でよく出てくる表現で「そんなはずはない」ときに使う副詞である。海外小説で原文に「That's impossible.」とある場合、直接的に訳すと「そんなの不可能だ」となるのを、「まさか」と訳しているときがある。原文には副詞はない。しかし語用論的な言語使用のレベルでいうと、「まさか」の方がシフトが小さい。

もう一つ、英語「Oh my god.」で考えてみよ



う。西洋の方が、驚いたときによく言うものだ。これを、日本語だとう訳しているか。文学の中では、「あらびっくり」や「仏様」と訳されている。ただ、驚いたときに「ああ、仏様」と言う日本人がいるのだろうか。翻訳ではこうした非日常的な日本語は許されているのである。

これを、3rd languageと呼ぶ。日本語は日常生活で使わないような「翻訳日本語」が、他の国に比べてとても多い。この「異常さ」がとても面白いのだ。読み替えることで生まれる、この3rd language性を、新たなコミュニケーションとして、自分たちの中に取り込めるのではないか、そのように先生は考えている。つまり、新たな表現形式が自分の中に、そして日本語の中に生み出されるのである。新しい文学性が創られているかもしれない。そしてその先に、今まで分かり合えなかった相手と分かり合えるかもしれないのだ。

### ■ 物事を自分ごと化できる人に

最後に、先生がどのような思いをもって研究をしているか、どのような学生を求めているのかについて触れていく。

### ■ 研究理念

野原先生は、言語に関する研究を長年続けてきた結果、言語というものの限界にも気がつきつつある。過去には、言語が全てを解決すると思っていたときもあったそうだが、それでもロジックをあきらめるのではなく、ロジックの違う表現はないのか、通常の言語にはない他のものにあるのではないかと思うようになった。

そういう問いがあるからこそ、デザイナーやアーティストなど様々なバックグラウンドを持った人たちを連れてきて、その人たちは、どういう風に自分のロジックを翻訳し表現しているのかを近くで見ているそうだ。

野原先生は、言語を介したコミュニケーションを見抜けることで、言語を超えるコミュニケーションを見つけないかと語る。

### ■ 求める学生像

研究室の学生は、自分の得意分野とコミュニケーションを掛け合わせて研究しているケースが多い。掛け合わせるときにキーとなるのが、「融合」であるが、このとき、学問の連続性という認識が重要だ。学問はどこまで行っても学問であり、何を学んできたとしても、自分のやってきたことを客観化して自分ごとにしてできているかどうか問われる。例えば、機械系の学生であれば、機械工学で学んできたことだけが重要なのではなく、「こういう方法・材料・分析が必要で、そのためにこういうことをしないといけない、この考え方は、言語学のこういうところに活かせるな」というように思考をスライドできる学生を求めているそうだ。そのためには、自分の中の体験・物事を抽象化・法則化することを重要視している。

この二つを何度も往復して考えられる人なら、異なる分野に進んでも、学問を融合できるのではないか。コミュニケーションの世界にも歓迎である。

### 執筆より

この記事を読んでいただいた皆様、本当にありがとうございます。今回記事を書くにあたり、お忙しい中協力していただいた野原佳代子先生並びに秘書の鹿取弥生さん、教務支援員の開めぐみさんに感謝申し上げます。

また、取材途中で2018年のムサビとの合同ワークショップへの参加も快く承諾してくださりありがとうございます。実際の異分野間のコミュニケーションの現場を経験するとともに、自分の言いたいことを相手に伝える難しさ、相手の言っていることを理解するための互いのコミュニケーションのプロセスの難しさも実感しました。これを読んでいただいた皆様も、是非野原先生の授業や研究に少しでも興味を持っていただければ幸いです。本当にありがとうございました。

(近藤 恭平)